

## 浅井了意『賞華吟』とその改題本

坂 卷 甲 太

### はじめに

浅井了意の『狗張子』（元禄五年刊）は、了意研究の鍵となる重要な作品であるといえよう。近世初期の約八十年間に亘って筆作された、多少とも文学性の認められる作品群を、名義や分類などに未だ問題点を残しながらも文学史上は仮名草子と称する。近時これら内容形式ともに多種多様な作品群及び作者に対するさまざまな角度からの研究が進められ、それぞれ成果が示されている訳であるが、仮名草子に含まれる多様な分野を追求していくと、何等かの形で浅井了意の存在に逢着することが多い。了意が生涯に世に問うた著作は各分野に亘って七十部六百巻に及ぶといわれているので当然ともいえるのだが、仮名草子作家の中で傑

出した大きな存在であったといえるであろう。しかし、了意の生涯と文学にはまだまだ不明の部分が多いのが現状で今後の究明を俟つべき問題が山積している。『狗張子』はその了意研究の原点であるといえよう。周知の如く『狗張子』には自序のほかに文会堂林九兵衛義端の序文が付されている、これが了意研究の鍵となるのである。これまでも了意を論ずる場合、しばしば注目され引用されてきた。例えば了意の歿年月日が元禄四年一月一日であること（最近傍証として④『見聞予覚集』の記事内容が紹介された）や了意の筆跡についての証言（義端の言を基にしてこれまで十三点の了意筆跡の版下本の存在が報告されている）等が唯一の資料として認められてきたのである。ここでは義端序の次の一節を導入として本稿執筆の意図を示すことにする。「洛陽本性寺の了意大徳は、きはめて博識強記にして

特に文思の才に富り。生平の著述はなはた多し。」という記述である。これは生存当時から了意に与えられた一つの評価であり特質であったと思われる。義端の言辭は単なる儀礼ではなく、当時の了意周辺の人々の共通した認識であったろう。確かに了意の博識は通り一遍のものではなかった。その膨大な著述のどれにも、内外古今の典籍の強い投影のあることはこれまでしばしば指摘され、出典・典拠を軸とした研究の数も多い。出典・典拠の調査研究がそのまま了意を説明する方法となり得ないことは勿論であるが、そのトータルを踏まえ、その博識が作品とどうかかわり、どう形象化されたかを追求することによって了意に切り込む方法が成立する。この意味で博識強記と賞揚された了意の実態を見究めることは重要な基礎となることはいうまでもないことなのである。了意が涉猟したのであるう内外古今の典籍はどのようなものであったのだろうか。それを明らかにするためには、全作品に互って、典拠があるならばそれを調査し、そこから帰納して実態を実証するのが最も正確な方法であることは言を俟たないが、ここでは了意の博識を如実に示しているといわれる『賞華吟』を取り上げ、第一段階として書誌を中心としたその調査結果を報告することにする。

最初に管見の及ぶ範囲で調査し得た『賞華吟』の書誌の紹介から始めよう。

○装幀 二巻五冊(原装)。寸法は二六・六×一七・六センチ。

○表紙 紺表紙。

○題簽 短冊型子持粹題簽(一七・八×三・九センチ)を表紙左肩に貼る。「賞華吟 一(一一五)」。

○内題 「賞華吟序」「賞華吟卷上之中」「賞華吟卷上之上」「賞華吟卷上之下」「賞華吟卷下之上目録」「賞華吟卷下之上」「賞華吟卷下之中」「賞華吟卷下之上目録」「賞華吟卷下之下」「賞華吟卷下之下目録」「賞華吟卷下之下(初一丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初二丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初三丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初四丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初五丁のみ)」。各冊本文の初めに「釈了意撰」とある。

○尾題 「賞華吟卷上之中終」「賞華吟卷上之下終」「賞華吟卷下之上終」「賞華吟卷下之中終」「賞華吟卷下之下終」。

○柱題 「賞華吟序」「賞華吟上之目録」「賞華吟上之上」「賞華吟上之中」「賞華吟上之下(初一丁のみ)」「賞華吟上之下」「賞華吟卷下之上目録」「賞華吟卷下之上」「賞華吟卷下之下(初一丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初二丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初三丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初四丁のみ)」「賞華吟卷下之下(初五丁のみ)」。

○匡郭 四周单边。寸法は二一・六×一四・八センチ。

○行数 毎丁十行。

○丁数 第一冊は十八丁、うち序文二丁、目録一丁。第二冊は二十丁。第三冊は十六丁。第四冊は十七丁、うち目録一丁。第五冊は十六丁。

○挿絵 なし。

○刊記 第五冊の最終丁（16終ウ）に

享保二十一年歲丙辰正月吉祥日

寺町通松原上ル町

藤屋 三郎兵衛

寺町通五条上ル町 新刻

皇都書林 藤屋 武兵衛

(国立国会図書館蔵)

『賞華吟』は国会本の外に筑波大本、早大本、日大本等比較的伝本が多い。矢島玄亮氏の『徳川時代出版物集覧』によると、版元の藤屋三郎兵衛は学深軒・古川三郎兵衛とも称したらしく、『永平開山道元大和尚仮名法語』（万治二年刊）以下八点の刊書を、相版元の藤屋武兵衛には四点の刊書のあることを記す。

『賞華吟』は翻刻もなく、またまとまった解説論考も皆無に近い。そこで本書執筆の意図を知る上でも、また後述の改題本を考える上でも極めて大事なことと思われるので、長文になるが了意の序全文を記すことにする。

四方ノ海。浪シヅカニ。七ノ道風ユルヤカニシテ雲ノウ

へ御館ノラクマデモ。ウゴキナク。平ゲクヲサマリ。ヒロキ御メグミハ野辺ノ草木ノ葉ヨリモシゲク。アマネキ政ハ。月日ノ光ニ。ヒトシケレバ。万ノ民コノウルホヒニ賑ハヒ。逢坂山ノサザレ水。木ガクレ。ハツル身モ。サヤマノ池ノ玉ガシハ。藻ニ埋モレシ人マデモ。君ガ代ノ久シカルベキコトヲイノリ。仏ノ。ミノリノ伝ハルコトヲタウトミ。文ニツクリ。歌ニツラネテモ。心ヲヨセズトイフコトナシ。時ニシタガヒ。折ニツケタル理リナルベシ。筑ノ後ノ国久留米ノ城島トカヤ。イナカビタル所ニモ。心アリケル法師ノスミワタリテ。順賀ト名ヅクメリ。正法寺トイフ寺ノ留主職アヅカリテ。年ゴロツトメノイトマ。華ニ思ヲノベテ。三十六種ノ標題ヲシルシ。京ニノボセテ。我がカタニヨセタリ。ヒラキテミルニ。華ノソダ、ヌ里モナシ。心カラコソトイフ。古歌ヲソヘテ是ニコト葉ガキセヨト。イヒラコセタル。実ニヤサンキコ、ロバエ。情アリテヲボヘシカバ。フルキ詩歌ヒトツフタツヲ引出シ。ソノ心ガシニカヨハセ侍ベル。詞ノハシ。フツ、カナルヲモ恥ガハシトモ思ヒタラズ。ワケテ二巻トナンテ。賞華吟ト名ヅクメリ。初ノマキニハ。標題二十四条ヲアゲテ。李太白ガ詩ニ。一千里邑江南岸。二十四番華信風トイフニアテタリ。後ノマキニハ。十二条ヲシルシテ。合セテ三十六条トス。邵康節ガ観物ノ詩ニ。天根月窟閑来往。三十六宮都是春トイ

フ。コ、ロニモトツケリ。天根月窟ノ事ハ。一行阿闍梨ノ。神光經ニモ。通甲書ニモミニ。三十六宮ノ事ハ。易ノ先天八卦圖ニアリ。我身ノウヘニソナヘタル。三十六宮ヨク守リテ。心静ニラサマレバ。精華常ニ榮ヘテ。イツモ春ノケシキナルベシ。寿モ猶イツマデモ。タモツベキヤ。世ノゾメキニカキミダサレテ。春ナガラ秋ヨリモハゲンキヤ。ソノアマレル理ハリハ。是ヲヨム人ノ心ニマカスルモノナラシト云。

貞享五年ツチノトノ辰。陸月中十日洛陽本性寺昭儀坊沙門釈ノ了意

右の序文からも明らかのように、本書の執筆を促したのは、筑後国久留米の城島にある正法寺の留主職である順賀という僧であった。即ち本書は順賀の書き送ってきた、華に関する三十六の標題に古歌を引用して詞書を加えたものである。『大日本寺院総覧』によれば、順賀が住していた正法寺は福岡県三潞郡城島町にある真宗大谷派の寺院のことであろうが、順賀に関しては『仏家人名辞書』その他管見の及ぶ範囲では記すものをみない。順賀が如何なる人物で、了意とどのような関係にあったのかは現在のところ全く不明であるが、了意と深いつながりがあったと推察される。了意の周辺を探ることは了意の全体像を描く上で欠かせない基礎調査の一つである。『狗張子』に序文を付し、上梓の版元の一人でもあった文会堂林九兵衛義端は書肆であ

り作家であり、かつ伊藤仁斎の門下でもあった。序文の文辞は単に作家と書肆との関係にとどまらないものを感じさせる。このことは山田喜兵衛や河野道清などのその他の書肆にも相通じるものがあるように思われる。特に山田喜兵衛の場合は、『天台三大部』（延宝二年・山田喜兵衛刊）を横川首楞院に奉納した際に添えた了意の肉筆願書の存在が両者の関係の深さを物語っている。また②野間光辰氏が推定された岡本玄治との関係、③北条秀雄氏が紹介された天台僧正の高弟容膝との関係、あるいは『因果物語』『鬼理至端破却論伝』をめぐる鈴木正三とその一門との関係も見逃せない。さらに了意の撰文を刻した鐘銘の問題もある。

④北条氏によると、鐘銘は現在三つまで判明している。即ち石川県小松市の西照寺（貞享元年の日付）のもの、滋賀県坂田郡近江町能登瀬の光円寺（貞享元年）のもの、三重県松坂市の西弘寺（延宝七年）のものである。これらはいずれも真宗大谷派の寺院である。如何なる経緯で了意が鐘銘の撰文を執筆したのかは明らかではない。これと『賞華吟』（貞享五年成立）序に記す正法寺（真宗大谷派）の順賀のことを考え合せてみると、了意の唱導活動に何等かのかかわりがあるのかも知れない。ともあれ、順賀は遠隔の地にありながら了意の周辺の人物の一人であったと思われる。順賀についての調査を今後の課題としたいと思っている。

ところで、『賞華吟』が刊行された享保二十一年は成立（貞享五年）から四十八年目、了意歿後四十四年目に当たる。その間、了意の原稿がどこにあったのか。野間光辰氏も<sup>(6)</sup>引用されている尾州藩士朝日定右衛門重章の『鸚鵡籠中筆記』の宝永七年三月二十二日の条に、了意の一子了山が京都の正願寺（了意は同寺の第二世住職）を売却し手習師匠になっていたという記事がある。この時点で恐らく了意の<sup>(6)</sup>蔵書や草稿類も四散したものとと思われる。宝永から数えても二十数年後の刊行というのはどうも気にかかる。享保二十一年版以前の版（遅くとも了意歿年の数年後の刊行）があったのではないかと予想されるのであるが、管見の範囲では見出せなかった。今後の調査に委ねたい。

本書を構成する三十六の標題を目錄に従って記すと次の如くである。

- |     |                                   |     |                     |
|-----|-----------------------------------|-----|---------------------|
| 第一  | 奉 <sup>レ</sup> 祝 <sup>ニ</sup> 宝算徳 | 第二  | 治世長久徳               |
| 第三  | 老後慰 <sup>レ</sup> 心徳               | 第四  | 仁慈愛憐徳               |
| 第五  | 賞 <sup>レ</sup> 華待 <sup>レ</sup> 人徳 | 第六  | 忘 <sup>レ</sup> 世情塵徳 |
| 第七  | 諸鳥来 <sup>レ</sup> 囀徳               | 第八  | 名譽遠聞徳               |
| 第九  | 早朝醒 <sup>レ</sup> 睡徳               | 第十  | 悦 <sup>ニ</sup> 諸人目徳 |
| 第十一 | 寿命増 <sup>レ</sup> 長徳               | 第十二 | 身意優艶徳               |
| 第十三 | 園中独 <sup>レ</sup> 楽徳               | 第十四 | 蓬扉自 <sup>レ</sup> 賑徳 |
| 第十五 | 疎人成 <sup>レ</sup> 親徳               | 第十六 | 山林増 <sup>レ</sup> 色徳 |
| 第十七 | 風流嬌艶徳                             | 第十八 | 調薬治療徳               |

- |     |                                   |     |                     |
|-----|-----------------------------------|-----|---------------------|
| 第十九 | 華後生実徳                             | 第二十 | 開落不改徳               |
| 第二一 | 妙香薰馥徳                             | 第二二 | 種植翫 <sup>レ</sup> 鮮徳 |
| 第二三 | 知 <sup>ニ</sup> 世衰盛徳               | 第二四 | 詩歌催 <sup>レ</sup> 興徳 |
|     |                                   |     | (上巻)                |
| 第一  | 世間風流徳                             | 第二  | 数見不 <sup>レ</sup> 飽徳 |
| 第三  | 神社添 <sup>レ</sup> 綵徳               | 第四  | 遊山家裏徳               |
| 第五  | 見 <sup>ニ</sup> 不 <sup>レ</sup> 織錦徳 | 第六  | 貴賤無 <sup>レ</sup> 隔徳 |
| 第七  | 物名寄 <sup>レ</sup> 花徳               | 第八  | 仏道因縁徳               |
| 第九  | 花知 <sup>ニ</sup> 頽齡徳               | 第十  | 遠華近見徳               |
| 第十一 | 觀 <sup>ニ</sup> 知無常徳               | 第十二 | 国家安全徳               |
|     |                                   |     | (下巻)                |

内容は右の標題に従って、華にちなんだ詩歌について記す。即ち上巻第一の「奉<sup>レ</sup>祝<sup>ニ</sup>宝算徳」を例に挙げると次の如くである。

芦原<sup>アソハラ</sup>ヤミダレヌ風<sup>カゼ</sup>。世々<sup>ヨヨ</sup>ニ吹ツタヘアマツ日ツギタガハ  
 スマツリゴト。アメニカナヒ。地<sup>チ</sup>ニヒラケテ。国<sup>クニ</sup>トミ。  
 民<sup>タミ</sup>ユタカナル。君<sup>キミ</sup>ノヲホンメグミヲ。被<sup>カハラ</sup>ルコトヲ。ヨロ  
 コビテ。千代<sup>チヨ</sup>トセノト。クリコトヲイハキ。歌<sup>ウタ</sup>ノ心ノ  
 内<sup>ウチ</sup>ニイノリ。言葉<sup>コトバ</sup>ノスヂニ念<sup>ネン</sup>ジ。タテマツラヌハナシ。  
 鶴<sup>ツル</sup>亀<sup>カメ</sup>ノ命<sup>イノチ</sup>ナガキハ。ソノ性<sup>セイ</sup>ニシタガフトコロ。人<sup>ヒト</sup>ノ命<sup>イノチ</sup>ヲ  
 タモツ事<sup>コト</sup>ハ。只<sup>ただ</sup>ソノ仁<sup>ニ</sup>徳<sup>トク</sup>ニアリト。楊<sup>ヤウ</sup>子<sup>シ</sup>が方言<sup>ヘンゲン</sup>ニモ記<sup>キ</sup>セ  
 リ。詩<sup>シ</sup>経<sup>キョウ</sup>ノ天<sup>テン</sup>保<sup>ポ</sup>ノ篇<sup>ペン</sup>ニハ。南<sup>ナン</sup>山<sup>サン</sup>ノ寿<sup>ユウ</sup>ノ如<sup>ニ</sup>シトイヘリ。唐<sup>タウ</sup>  
 ノ魏<sup>ケイ</sup>元<sup>ゲン</sup>忠<sup>チュウ</sup>ガ詩<sup>シ</sup>ニハ。ネガハクハ南山<sup>ナンサン</sup>ノ寿<sup>ユウ</sup>ヲタテマツリ

テ。千秋トコシナヘニ是ヲ荐ントイヘリコトブキナガク。国ヲサマリ。民ヤスクバ。又何ノウレヘカ。マシマ

サン。漢書ノ王吉ガ伝ニハ。コレヲ仁寿ノ城ニ躋トモイヘリ。北魏ノ薛孝通ガ詩ニ。既ニ堯舜ノ君ニアフ。ネガ

ハクハ万年ノ寿ヲ上マツラントイヘリ。或ヒハ南嶽ニナゾラヘ奉リ。又ハ北辰ニヨソヘ。天トヒトシトモ。マフ

ストカヤ。永徳二年中殿ノ御会百首ノ歌ニ。華契ニ万春ト云フ事ヲ。世良親王ノヨマセ給フ

ヲ。百シキノ。三垣ノ桜。咲ニケリ。万世マデノ。春ノカザシニ

文和二年ノ御会ニ。松有佳色ト云事ヲ。実名中将イカニヘン。君ガ千トセノ。十カヘリニ。華咲松ノ。

色ニユニユラン。統千載集ニ。一条内大臣ヨマセ給フ

民ヤスク。国ユタカナル。御世ナレバ。君ヲ千トセト。誰カイノラス

『賞華吟』は右に例示した内容からみても明らかにように、了意の詩歌殊に和歌についての博識ぶりを如実に示したものであり、『新語園』(天和二年刊)に於ける豊富な中国説話とともに了意を考える上で欠かせないものであるといえよう。

二

『賞華吟』を改編し、書名を『詩歌英華故事』とした改刻改題本がある。その書誌は次の如くである。

○装幀 五卷五冊(原装)。寸法は二五・四×一七・八センチ。

○表紙 紺表紙。

○題簽 短冊型子持枠の黄色の題簽(一七・二×三・四センチ)を表紙左肩に貼る。「詩歌英華故事 一(二(五))」。

○内題 「序」「英華故事卷一(三・四・五) 目次(卷二のみ「目録」とある)。「英華故事卷一(二(五))」。

○尾題 「英華故事卷一(二(五))」。

○柱刻 版心にはなく、綴じ目(のど)の下方に「序」、目次は「一(二(五))」、本文は「一(二(五))ノ二(二(八丁数V))」と巻数と丁数を刻している。

○匡郭 四周単辺。寸法は二一・六×一四・九センチ。

○行数 毎丁十行。

○丁数 卷一は序一丁、目次一丁、本文十七丁。卷二は目次一丁、本文十六丁。卷三は目次一丁、本文十五丁。卷四は目次一丁、本文二十丁。卷五は目次一丁、本文十六丁。

○挿絵 なし。

○刊記 卷五の最終丁(16ウ)に

安永六丁酉年二月

高麗橋一丁目

大坂書林

藤屋 弥兵衛

寺町通五条上ル町

京都書林

額田 正三郎

東六条中珠数屋町

池田屋 七兵衛

(筑波大学図書館蔵)

『国書総目録』は『英華故事』の伝本として筑波大本、東洋大学(哲学堂)本を著録するのみである。稀本のようである。東洋大本は五卷二冊で、第一冊の始め(序文の後)に卷一から卷五までの目次を取りまとめているほかは筑波大本と同じ。矢島玄亮氏の『徳川時代出版集覧』によると、版元の一人藤屋弥兵衛は星文堂・浅野弥兵衛とも称し、『明智軍記』(元禄十五年刊)をはじめ六十余点の刊書を有する。大坂では老舗の書肆であったようである。相版元の額田正三郎は伊勢屋・九草堂ともいい、四十余点の刊書がある。同じく相版元の池田屋七兵衛は黒石氏・海運館ともいい、四点の刊書を有する。『賞華吟』の版元藤屋三郎兵衛・藤屋武兵衛と『英華故事』の藤屋弥兵衛とは同じ屋号であることから特に密接な関係があったのやも知れない。

い。改題に伴なう版權板木の譲渡はその関係からとも考えられる。

『英華故事』は『賞華吟』の板木を改刻改編した後摺改版本である。その状況は次の如くである。まず『賞華吟』巻頭の了意の序文二丁を省いて「釈借明」の序文一丁を加える。『賞華吟』の標目(目次)を全部省いて新たに目次を卷一から卷五に編成し直して新刻している。例えば『賞華吟』の標目「第一 世間風流徳」の「第」と「徳」を取り、『賞華吟』には無い付言(内容に即した)を多く付け加える。「一 世間風流 風流ノウタ 佐ノ法印成海ノ事 蓮花六郎ニ似タル事 虞美人草ノ事 并詩」の如くである。本文は『賞華吟』の板木を使っているが、内題・尾題を削り、『英華故事』の「(一)五」と入木。全標目の、例えば「第一 世間風流徳」の「第一」という通し番号と「徳」を削り、各冊の始めにある「釈了意撰」の左横に「釈義便校合」と入木している。柱題・丁付をすべて削り落し、綴じ目(のど)の下方に巻数・丁付等を刻していることは前記書誌紹介の如くである。

また『英華故事』は『賞華吟』本文の順序を次の如く改編している。即ち『賞華吟』の巻上上に収まる「第一 奉祝三算徳」から「第九 早朝醒睡徳」を『英華故事』の巻上に、巻上之中に収まる「第十 悦諸人目徳」から「第二十 開落不改徳」を巻四に、巻上之下に収まる「第

二一 妙香薰馥徳」から「第二四 詩歌催興徳」を巻五に、巻下之上に収まる「第一 世間風流徳」から「第七 物名寄花徳」を巻一に、巻下之下に収まる「第八 仏道因縁徳」から「第十二 国家安全徳」を巻二にそれぞれ改編している。以上の如く、『賞華吟』の板木を使いながら、その改刻改編がかなり入念で、一見別本の如き印象を与えている。

『英華故事』に新たに付した釈僧明の序文は次の如くである。

尊者了意者法門之博物三藏九流吞若大海其所著鼓吹語園等數百卷既伝於世固大方之所壯也然斯書三十六篇唯花是賞蓋有所託焉蔚矣其文宛轉善誘尤工縁情最弘無方而多年猶未流行何其冤耶雖則冤耶亦若非有中郎之齋闕帳中則或如下秦孝之聞有寐與一者矣書林某新鐫徵之余素欽尊者是以不自量遂叙

安永丁酉之春

釈僧明拜識

右の序文を執筆した「釈僧明」及び各巻の始めに「釈義便校合」とある「釈義便」については現在のところ未詳である。後考を俟ちたい。

改編された改題本の『英華故事』について『享保以後大阪出版書籍目録』に「英華故事五冊／以前「賞華吟」と題せしを改題申出／作者 釈了意／板元 藤屋弥兵衛／右板

元よりの申出でを本屋行事にて聞届け板行／申出年月／宝曆十四年三月十日」の如くある。先記の筑波大本・東洋大本は序文も刊記も安永六年と刻している。改題版行を申出て聞届けられてから十三年目の刊行は如何にも不自然である。宝曆十四年は六月に改元されて明和元年となっているので、改題本の初版は改元前後に刊行されているのであるまいかと推定し、明和九年刊の『大増書籍目録』を調べると、果して「故事」の項に「五 英華故事 釈了意」とあった。従つて宝曆十四年ないし明和初年の刊記を有するであろう改題初版本の存在したことは確かであった。安永六年刊の『英華故事』はその後摺再版本であるといえよう。しかし、改題初版本の所在は現在のところ不明である。今後の調査を俟つとともに諸賢の御示教を乞いたい。

### △おわりに△

以上、『賞華吟』とその改題本『英華故事』について書誌調査を中心に述べてきた。今後の課題を列記して結びたい。その一は『賞華吟』には享保二十一年版以前の版本の存在が予想されること。『英華故事』には宝曆十四年ないし明和初年に刊行された改題初版本が確かに存在したこと。これら版本の搜索調査である。その二は『賞華吟』執筆のきっかけとなった正法寺の順賀（恐らく了意周辺の



人物の一人と推定される) についての調査である。その三は『賞華吟』の内容についてである。『賞華吟』に引用する夥しい数の詩歌についての知識を了意はどこから得たのであるうか。了意の怪異小説『伽婢子』『狗張子』には多くの古歌がちりばめられ、それが作品の文学性を高めていることは夙に指摘されてきた。その古歌の典拠については(7)富士昭雄氏に貴重な論考がある。紙幅の都合で示唆に富む富士氏の論考に触れることが出来ないが、これらを含めて、『賞華吟』を中心とした、古歌についての了意の知識の実態を調査し、それが了意の文学とどうかかわったのか。その究明が今後の大きな課題であることはいうまでもない。

#### 注

- (1) 前田金五郎氏「資料片々録」(『見聞予覚集』) (専修大学・人文科学研究月報) 60号、昭和53年7月)。「見聞予覚集」は『枚方市史』第九巻に所収の河内国交野郡津田村(現大阪府枚方市津田町)居住の山下安兵衛筆録の日記で、元禄二年元旦から同十四年大晦日まで八冊に記載されている。これに晩年の了意に関する記述、特に説教者としての行動が記されている。
- (2) 野間光辰氏「了意追跡」(北条秀雄氏編著『増補浅井了意』昭和47年3月、笠間書院刊)。

(3) 北条秀雄氏「新修浅井了意」(昭和49年9月、笠間書院刊)。

(4) 注(3)に同じ。

(5) 注(2)に同じ。

(6) 朝倉治彦氏「浅井了意の周囲書留」(勉誠社だより) 第四号、昭和54年7月)によると「乾々斎架蔵和書目録」に「難経(浅井意旧蔵) 元和三年 一冊」と了意旧蔵本が著録されているということである。

(7) 富士昭雄氏「伽婢子の方法」(名古屋大学教養部紀要) 第十輯、昭和41年2月) 及び「浅井了意の方法」(名古屋大学教養部紀要) 第十一輯、昭和42年3月)。

#### 付記

閲覧調査を許された国立国会図書館・筑波大学図書館・東洋大学図書館及び種々教示をいただいた朝倉治彦氏、谷脇理史氏に深謝いたします。

(さかまき・こうた 就実女子大学教授)